

# Educo

地球時代の教育情報誌 **エデュコ**

**No.23**  
2010年 秋

2 | 巻頭インタビュー  
分子生物学者

## 福岡 伸一さん

4 | **知っておきたい教育 NOW**

校内研究・研修の課題と今後の展望

小林 理人

協働する教師集団へ

高野 剛一

8 | **きょういく見聞録**

ウガンダの理数科授業を変える SESEMAT

盛山 隆雄

10 | **地球となかよしトピックス**

まちの人々とかかわり

たくさんの価値観とふれあう

川崎市立川中島小学校

12 | **インフォメーション 北から南から**

14 | **地球となかよしゼミナール**

子どもたちに教えられた  
環境教育における大切なこと

本橋 大喜

15 | **コラム いまどき子ども事情**

「自意識過剰」が人生の原動力

香山 リカ

16 | **ほっとな出会い**

料理研究家

**コウケンテツさん**

福岡 伸一さん (分子生物学者)

大人は、子どもたちに  
自分のセンス・オブ・ワンダーを  
語ってほしい。

子どものころの関心が、科学者としての今にどう影響していますか。

私は、昆虫が大好きな少年でした。子どものころは、うちの中にいろんな虫がいっぱいいて、フンもするし、さなぎになるときは、家のいろんなところへ、さなぎになるための場所を探しに行っちゃいます。それが座布団の下でつぶれていて大騒ぎなんてことがたびたびあったんですが、捨てなさいとか、こんなことやめなさいとか一度も言われたことはなかった。好きなようにさせてくれて、親には感謝しているんですけど、本当はいやだったんじゃないかなあ(笑)。

ボシカミキリというんですが、その虫はすごくきれいな青色をしていて、こんな青い色がどうしてこの世界にあるのかと。それが私の sense of wonder(センス・オブ・ワンダー)であり、科学への興味の原点です。これはレイチェル・カーソンが言った言葉で、「自然の美しさに魅かれる」「自然への畏敬の念」などと訳されますが、自然の美しさ、清明さに驚く心、それが子どもにとって非常に大事なことだと思えます。自然に対しての謙虚さを教わるというか、自然には、人間が傲慢になりがちなのを諫める力がある。人間の力ではどうしてもつくれないような美しさが自然の中にはあるということ

に気がつく、それがセンス・オブ・ワンダーです。

現代の科学研究のあり方についてのどのようにとらえておられますか。

あらゆることにゴールがあつて、そこにいかに早く到達するかということが現代社会で求められていることなんですよ。それが効率と呼ばれるものでしょうが、実は、勉強するとか何か上達するとか、ほとんど人間の営みについては、ゴールよりもそのプロセスのほうに価値があると私は思っています。

DNAの二重らせん構造を解明してノーベル賞を受賞したのはワトソンとクリックですが、彼らがその解



PROFILE

福岡 伸一  
1959年東京生まれ。京都大学農学部卒。青山学院大学理工学部 化学・生命科学科教授。研究テーマは、狂牛病感染機構、細胞膜タンパク質解析など。著書に『世界は分けてもわからない』(講談社現代新書)、『動的平衡』(木楽舎)、対談集『エッジ・エフェクト』(朝日新聞出版)など。翻訳書も多数。

明に至ったのは、10年ほど前にDNAが遺伝子の本体だと見つけたエイブリーという人がいて、構造を解明すれば、生命科学上すごい発見になるということがあらかじめわかってきたからです。科学では、1位と2位、3位の研究のほうが大変なジャンプだったりすることがいっぱいあるんです。なぜその発見に到達できなかったかということのほうが科学的に大事なこともたくさんある。そのプロセスの厚みが本当の科学振興なんです。

科学史の流れもそうだし、個人の勉強でも、点数という結果より、なぜここで失敗したかとか、どうして

\*レイチェル・カーソン：1960年代に環境問題を告発したアメリカの生物学者。主著「沈黙の春」。



ここに気づけなかったのかとかを考  
えるプロセスのほうが大事です。公  
式や解法を覚えて解くのも一つの勉  
強法ですけれども、公式がどうして  
編み出されたか、だれがいつ、どう  
やって考え出したか、なぜその公式  
が求められなければならなかったの  
かとか、いろんなプロセスがあるわ  
けです。そういうことを学ぶのが、  
学びの豊かさなのであって、問題が  
解けるということは、結果の一つで  
しかないということです。

**科学者として、子どもたちの「理科  
離れ」についてどうお考えですか。**

子どもたちの理科離れの最大の理  
由は、大人が理科に興味を持ってい

ないからですよ。

例えば、宇宙から帰ってきた小惑  
星探査機「はやぶさ」のカプセルの  
中に何が入っているか。もしカプセ  
ルの中にアミノ酸が一つでも発見さ  
れたらどうなのか。46億年前に地球  
ができて、たった8億年で生命が誕  
生した。誕生前の8億年とその後の  
進化の38億年という時間のギャップ  
は、なかなか解けない生物学の謎な  
んですが、もしかしたら宇宙のどこ  
かで最初に変化が起きていて、それ  
が宇宙空間にばらまかれて降り注い  
できたのかもしれない。その痕跡が  
地球と火星との間の小惑星イトカワ  
にあるのであれば、地球の生命の起  
源というのは、どこか宇宙の別のと  
ころにあるのかもしれないと夢が広  
がっていくわけです。

だからこそ、「はやぶさ」が何を  
持ち帰ってきたかというのがそんな  
にも注目されているんだということ  
を、身近な大人がもつと語ることが  
できたら、子どもも興味を持ち、そ  
こからいろんなことを考えることが  
できます。はるばる行って帰ってき  
てすごいなあ、カプセルが空だった  
らどうするの、だけで終わるのでは  
なく、科学が目指していることは本

当にたくさんあるということに、  
もつと関心を持ってほしいですね。

**子どもたちに、大人は何を語るべき  
でしょうか。**

私は、センス・オブ・ワンダーを  
子どもたちに見つけてもらいたい。  
でもそれは、大人が押し付けること  
はできない。私がルリボシカミキリ  
の青がすばらしいと思って、いくら  
子どもにすごいだろう、と言っても、  
なにこの変な虫、と言われることの  
ほうがずっと多いと思うんですよ。  
だから、大人ができることは、自分  
のセンス・オブ・ワンダーを語るこ  
としかないと思う。そのことで、子  
どもは、自分のセンス・オブ・ワン  
ダーは何かなと考えることができる  
んです。だから先生には、自分が夢  
中になったことや、学んできたプロ  
セス、何かに気づいた瞬間のことを  
子どもに語ってあげてほしいです  
ね。自分の体験を伝えるということ  
が、教育で一番大事なんじゃないか  
と、思っているんです。

そして、「勉強する」ということは、  
人間が世界を勝手に解釈しているけ  
れども、実はそうじゃない、もつと  
世界というのは豊かだということ

知ることだと思えます。例えば、人  
間の可視光というのはすごく狭い周  
波数の範囲でしかない。モンシロ  
チョウは、紫外線を見ることができ  
るから、メスだけ特別な色に見えて、  
そこにオスが寄っていくんです。世  
界を見るのに、人間の脳は、人間の  
都合のいいように五感にバイアスを  
かけているんです。

私は、子どもたちに、「勉強する  
ことによって拓ひらかれるものがある」  
ということを伝えたいですね。自分  
が五感で感じているものから自由  
なる、その可能性を教えてくれるの  
が勉強だと。勉強というのは、私た  
ちを縛り、視野を狭くする落とし穴  
から私たちを救い出し、自由にして  
くれるものであると私は思います。

**著書紹介**



ルリボシカミキリの青  
文藝春秋 2010年

生物と無生物のあいだ  
(第1回新書大賞)  
講談社現代新書 2007年

## 校内研究

# 校内研究・研修の課題と今後の展望



東京都国立市立  
国立第一小学校校長  
小林 理人

現在、学校は、教育の質を高め、子どもたちに確かな学力を身に付けさせるとともに、豊かな心や健やかな体を育むことが求められている。その実現のためには、教師の力量を強化することが必要である。そして、その方法として重視されているのが校内研究・研修である。

しかし、勤務時間の短縮、授業時数の増加等により学校の多忙感が増す中であって、期待しているような成果が上がっていない現状がある。そこで、(財)教育調査研究所が平成21年度に行った「校内研究の実態と課題」

に関するアンケートの結果をふまえ、校内研究を中心にその課題を明らかにするとともに、具体的な解決策を本校の取り組みをもとに考えてみたい。

### 校内研究の現状

(財)教育調査研究所は、全国24都府県の678の小中学校の管理職、研究主任、経験5年目までの若手教員及び102の教育委員会を対象に、校内研究の実施状況や実態についての調査を行った。その結果を平成22年5月に『研究紀要第90号』としてまとめている。その中から校内研究の実態と課題として指摘している内容の一部を紹介する。

- 校内研究の主題では、学力に関するものが圧倒的に多く、小学校においては全体の74%が学力に関する研究主題を設定している。
- 管理職が校内研究で最も重視しているものとして「指導力・授業力の改善」があげられている。(小学校の校長の64・8%)
- 管理職が校内研究の大きな課題としてあげているのは「研究をリードする教員の力量の向上」「時間の確保」である。
- 研究主任は、教員が積極的に参加できるように、参加体験型の研修やワークショップ形式での協議会等の工夫を行っている。
- 小学校の若手教員の8割以上が、校内研究に「指導力・授業力の向上」を期待している。また、その多くが校内研究を通して力

がついたと自覚をしている。

### 校内研究の課題

調査結果から明らかになった課題を整理すると次の3点に集約することができる。

- 研究内容や目的から、学校は学力の向上に強い問題意識をもっており、それを実現するための授業力・指導力の向上のための研究の在り方が大きな課題である。
- 校内研究の充実を阻害する要因は、研究をリードする人材不足と時間の確保である。校内研究をリードする人材を育て、限られた時間の中で効果的な研究を行うことが課題である。
- 研究会のもち方や授業研究の方法がマンネリ化し、新しい手法等の情報が不足していることが課題である。

### 校内研究の充実に向けた取り組み

#### 1 模範授業で授業のイメージを共有

前に紹介した調査結果によると、小学校の若手教員の8割以上が、校内研究に「指導力・授業力の向上」を期待している。そこで、校



▲プール開きを前に水泳の指導法について研修を行う

内研究をスタートするにあたり、模範授業を実施し、授業の基礎・基本が具体的に理解できる研修を行った。模範授業は校内でできる教員がいる場合には校内の教員が行うが、本校では校外から経験豊かな専門性の高い講師をお招きして体育の模範授業を行った。

整列の仕方、号令のかけ方、運動量を確保するための活動の組み立て方など、若手教員にとってはよい手本となり、中堅、ベテランの教員にとっては、学校全体で取り組むべき内容を考えるうえでの絶好の刺激となった。

## 2 ワークショップ形式の研究協議会

研究協議会を活性化し、個々の教員の参加意識を高め、協働研究として実のあるものとするためには、その進め方を工夫する必要がある。その一例としてワークショップ形式の



▲子どもの目線の高さで話をする講師の先生



▲模造紙によるプレゼンテーションを行う若手教員

研究協議会を紹介したい。進め方及び留意事項は以下のとおりである。

① 授業を見る視点については事前に共通理解を図り、一つか二つの視点に絞っておく。

② 授業を見る視点での自評に続き、小集団での意見交換をする。話し合いの材料として授業記録か本時の展開部分を拡大し、授業の視点からの感想や意見を付箋に書いて貼り付けていく。

③ ファシリテーター（会の進行役）は、研究推進委員かベテラン教員が務め、和やかな雰囲気で見点の絞られた話し合いができるようにする。

④ 話し合われた内容は、模造紙またはパソコン上のシート等にまとめ、プレゼンテーションにより発表する。

## 3 模範授業を取り入れた校内研修

参加者がより主体的になる研修形態として模範授業が盛んに行われるようになってきている。特に初任者や2、3年次等の経験年数の少ない教員対象の研修会においては、夏季休業日中の宿泊研修の一環として行われる場合が多い（夏季休業日中であり子ども対象の授

業研究ができない等の理由による）。そして、最近では、校内研修においても指導案検討の手法の一つとして取り入れている学校が増えている。

模範授業を取り入れた校内研修の留意すべき事項は、次のとおりである。

① 45分のすべてを行うのではなく、課題とした活動や発問構成等、明らかにしたいことを明確にして行う。

② すべてが子ども役になって行ったり、子ども役や参観者、記録者等の役割を明確にしたりして行う。

③ 授業後は、子ども役の教員から子ども立場での意見をもとに明らかにしたいことについての協議を行い、指導法の検証を行う。

④ 検証後に、役割を交代して繰り返し行うなど研修の進め方を工夫する。

## まとめとして

若い教員の割合が高くなっている現在、これからの学校には、強い課題意識をもち、自らの資質の向上を求める教員の声に、学校としてどのように応えていくかが求められている。それは、校内研究・研修の充実のために、避けては通れない大きな課題である。

### 参考文献

「研究紀要 第90号  
校内研究の実態と充実のための方策」  
（財団法人 教育調査研究所）

## 校内研究

### 協働する教師集団へ



東京都台東区立千束小学校  
主幹教諭  
高野 剛一

新学習指導要領の完全実施が、間近に迫っている。新教育課程の編成にあたり留意する点は、「生きる力」をどうはぐくみ、児童に「質の高い教育」をいかに保障するかということである。この「質の高い教育」を保障するために最も重要なことは、教師の資質・能力の向上である。

しかし、現在教育現場では、若手教員が急速に増え、本校でも経験年数10年以下の教員が、3分の2以上を占めている。そのような若手教員は、毎日夜遅くまで残り、翌日の授業の教材研究や校務事務などに追われ、多忙感を感じている。また、以前であれば、ベテ

ランの先輩教員から受け継ぐべき指導技術が身に付かず、見通しをもった職務遂行が難しい。無駄な時間ばかりを使ってしまい、より多忙感を感じてしまうという、悪循環が生まれている。

これらの問題を解決し、教員一人一人が高い指導力を身に付けていくためには、学校の組織的な体制づくりが必要不可欠になってくる。

そこで、本校の取り組みを紹介しながら、今後校内の研究・研修体制の充実を図るためには、どうあるべきなのかを考えていきたい。

#### 組織的なOJT体制

本校では、3年前から授業力向上に向けたOJT (On the Job Training) Ⅱ 実際に仕事を進めながら業務に必要な知識や技術を習得させる研修) を校務分掌に位置付け、組織的に行っている。

まず、教務主幹教諭が日程調整を図り、週に1回程度、OJT会議の時間を確保するように努める。この会議では、リーダーを中心に年間の計画を立て、授業力向上を目指した話し合いを進めている。(リーダーは、経験年数3年目の教員が務め、若手教員の主体的な取り組みを促している。)

具体的には、まず各教員は「授業改善マネジメントカード」(次ページ参照) という本校独自のカードを作成する。そして、それを



▲研修風景

基にした授業を行い、他の教員に公開する。授業後には協議会を行い、よかった点や改善点を話し合う。これを一人が学期に1回以上、年間を通して繰り返し、授業力向上を目指している。

その他にもOJT会議では、教師の資質・能力の向上をねらい様々な取り組みを行っている。

例えば、学級活動をどう行うべきかを話し合う「特別活動研修」や体育の指導法に関する「体育実技研修」、そして各種学力調査の結果を分析して検討する「学力調査分析研修」などである。これらは、各教員から提案され、講師も校内の教員が務めている。

## 質の高い授業

さて、組織づくりとともに重要なのは、内容面である。つまり、「質の高い教育」を保障するために、どれだけ「質の高い授業」を展開できるかということである。

本校では、「質の高い授業」を目指すため、次の2点にポイントを絞り、全教員で共通理解を図っている。

### 1 「千束授業スタンダード」の確立

千束授業スタンダードとは、本校の教員が授業を行う際に身に付けておくべき共通理解事項である。これらの事項は、数年間の校内研究で蓄積したことをまとめたものである。具体的には、学習環境や学習形態、さらに

教師の子どもに対する姿勢や言葉かけなどを細かく示している。例えば、授業の導入では、必ず本時の学習のねらいを板書することや、

学習の履歴としての掲示物を適時・適切に更新するといったことである。教師の子どもに対する姿勢では、「聴いて、助けて、見守る」という意識をもちながら、子どもとともに授業を作り上げていく姿勢で授業に臨むように示している。

### 2 授業観の明示

もう一つのポイントが「授業観」である。「授業観」とは、一言で言えば「自分がどういう授業をしたいか」ということである。この「授業観」を一人一人の教員が、前述の授業改善マネジメントカードで明らかにしている。それ

は、どの教科や単元でも展開できるもので、その授業観の実現に向けて教員は様々な工夫を行っている。

例えば、一人の教員は、「つながりを感じる授業」という授業観をもっている。その実現に向け、二人組や三人組での学習形態をとったり、話し合いの視点を示したりするなどの工夫を凝らしている。

この授業観をもつときに大切なことは、常に授業イメージを明確にして、子どもたちと試行錯誤しながらつくっていくことである。そうすることによって、自分のスタイルが確立し、教師としての専門性を高めることができる。

### 協働する教師集団へ そして今後の展望

このように本校では、組織的な体制の中で自己研鑽と相互研鑽を繰り返すことによって、協働する教師集団へと変貌してきた。毎年行う児童へのアンケートの「先生方は工夫した授業をしてくれていますか。」という項目で、今年度肯定的な回答が9割を超えた。この結果に満足することなく、さらに研修を深め、協働する教師集団の定着に努めたい。

今後は、近隣の小学校と連携して若手教員育成システムを共同構築したり、幼稚園や中学校など異校種と共同研修を行ったりするなど、より広い視野での充実を図ることが求められる。

このような研修体制は、横軸としての地域の広がりや、縦軸としての幼・小・中の12年間の発達段階での広がりを期待することができ、「質の高い教育」をより充実させていくためには、必要である。

本校では、併設の幼稚園との交流学習や共同でスタートカリキュラムを作成するなどの取り組みを進めているところである。

授業改善マネジメント カード	
NO. 1	名前 ( )
<b>R (課題把握)</b>	児童に「自分の考えを伝えよう」という自信をもたせていない。
<b>P (授業観) 「こんな授業にしたい!」「こんな子供に育てたい!」</b>	「つながりを感じる」 安心して伝え合う活動を通して、「伝えよう」「受け入れよう」という自信をもたせたい。
<b>D (具体的な手だて)</b>	<input type="checkbox"/> 学習形態・・・2人組や3人組での活動を意図的に計画的に設定する。 <input type="checkbox"/> 視点の明示・・・話し合いの視点を明確に示したり、話し合いのモデルを示したりする。 <input type="checkbox"/> 教師行動・・・個と個、個と全体をつなぐ投げかけを意図的に行いながら、媒介者として児童の活動を活性化させる。
<b>C (リフレクション・児童評価からの成果と課題)</b>	<input checked="" type="checkbox"/> 3人組での話し合いは有効である。1脚の机で話し合うことで親密圏を築くことができていた。 <input checked="" type="checkbox"/> 児童にとって話し合いの目的が不明瞭だったようだ。より現実性(リアリティ)のある話題で話し合うことで、目的が明確になる。
<b>A (改善策)</b>	◎ 児童にとって、現実性(リアリティ)のある話し合いができる場を設定する。 今回の授業改善の視点は「リアリティ」とする。



Training) の制度が立ち上げられ、実施された。

こういった SMASSE のアプローチは高い評価を得ることができ、ケニアの教育的資源開発省では、同アプローチの初等教育への拡大を打ち出してきている。そして、この活動はケニアに展開されるに留まらず、現在ではアフリカ 34 国が参加するまでに発展してきたのである。

ウガンダ共和国の SESEMAT の活動は、ケニア発の SMASSE の活動をウガンダ流に展開しようとしたものである。

#### ● 短期専門家によるウガンダ授業力向上セミナー

SESEMAT の活動の一環として、2010 年 3 月 22 日～26 日に、短期専門家による第 2 回ウガンダ授業力向上セミナーが開催された。短期専門家として日本から派遣されたのは、坪田耕三氏（筑波大学教授）と盛山隆雄（筆者）であった。

セミナーに参加した国は、ウガンダ、ケニア、ガーナ、ナイジェリア、エチオピア、ルワンダ、ザンビアの 7 か国であった。各国からは、現職教員だけでなく、ナショナルトレーナーと呼ばれる国を代表する理数科の指導者や教員養成系の大学教員など、三十数名が参加した。

このセミナーは、昨年の同時期の開催に続き 2 回目の開催になる。第 1 回のセミナーでは「良い授業とは何か」というテーマのもとに研修を行った。今回は「生徒の思考・理解を把握する授業」というテーマが設定された。

基本的に授業研究を軸に研修を進めた。各国の代表者が 1 本ずつ実際に授業を行った。そのために、生徒の思考をどのように把握するかを念頭において事前に指導案を検討した。私も同じように、中学生



を相手に 2 本の数学の授業を公開した。

一つの授業は、きまりを見つけて問題解決する授業で、もう一つは面積の授業であった。面積の授業については、数学を専門とする他国の教師も同じ面積の授業を行い、その違いについてディスカッションを行った。

#### ● 夢を語るアフリカの先生

正直に言って、今回セミナーに参加されたアフリカの先生方の授業は、まだまだ課題が多いと感じた。生徒中心にやろうとする気持ちはわかるが、とにかく生徒の活動ありきで、その活動の意義が見えてこない。授業のねらいに結び付かない活動になっていることが多い。

しかし——、驚いたのは、セミナーのどの参加者も「生徒中心」の授業について語る。その考え方は、しっかりと浸透していた。

困難な道のりでも、まずは夢を語ること、理想を語ることが先決である。今まで自分たちがやってきた授業とは全く異なる授業文化を受け入れようとしている。実際に日本の授業を見て、日本の生徒の姿を見て、「これだ」と納得して受け入れようとしてくれているのだ。

「夢を語るアフリカの教師の姿」こそ、今回のセミナーの成果ではないか。すでにアフリカの多くの地に「生徒中心」の理数科授業の種はまかされている。その種が芽を出し、やがて花開くことを願っている。☘

● 写真提供 (p.8) ●

中野区立塔山小学校 太田耕平先生  
(青年海外協力隊 21 年度 1 次隊 [ウガンダ])

# きょういく 見聞録

## ウガンダの理数科授業を変える SESEMAT(セセマツト)



**S**ESEMAT(セセマツト)とは、Secondary Science And Mathematics Teachers Programme の略語である。アフリカのウガンダ共和国で、中等理数科教育を強化することを目的とし、日本のJICA(独立行政法人国際協力機構)とウガンダの政府機関が協力して行っている活動のことである。今年3月に、このSESEMATの活動の一環として、ウガンダ授業力向上セミナーが開催された。ウガンダ共和国を含めて7カ国の代表者が集まって学び合った。このセミナーへの協力者として参加した立場から、セミナーの内容と日本の算数・数学教育がアフリカに何をもたらすのか、その可能性について述べる。

筑波大学附属小学校教諭 せいやま 盛山 隆雄

### ●アフリカに広がる中等理数科教育強化の波

1998年、ケニアにおいて「中等理数科教育強化計画(SMASSE《スマッセ》・Strengthening Mathematics and Science at the Secondary Level)プロジェクト」がスタートした。

このプロジェクトが起こった経緯について、その当時チームリーダーを務めた国際協力専門員の杉山隆彦氏は次のように述べている。

「日本は1960年代から青年海外協力隊の理数科教師派遣を行っていたので多くの蓄積があり、また理数科分野はあまり政治的なイデオロギーに関わらな



いので、支援がしやすい。当時、アフリカ諸国は近代化と共に、工業化を成功させるために科学技術の進歩が必要だと考え、アジアの中で工業国として成功した日本から多くのことを学びたいと思っていた。そこでJICAは中等レベルの理数科教育分野の協力を力を入れ始めていった」

実際、多くのアフリカ諸国では、特に理数科科目の教育に難点があった。例えば、支援を行う前にケニアで調査を行った結果、子どもたちの理数科教育の成績が上がらないのは、教員の理数科教育に対する姿勢などが要因として挙げられた。また、ケニアの子どもたちに、理数科科目は難しいという固定観念があることも判明していた。これらのことは、ケニアだけでなく、おそらくアフリカ諸国全体にあてはまることと推測された。

そこで、SMASSEプロジェクトでは、教員が指導法を工夫し、生徒中心の授業を心がけることにより、生徒たちが理数科目への興味を持ち、主体的に楽しく学習するようになり、結果として理数科学力が向上するというシナリオを描いた。

その具体的な方策の一つとして、現職教員研修(INSET《インセット》・In-Service Education and

かわ なか じま  
神奈川県 川崎市立川中島小学校

# まちの人々とかかわり たくさんの価値観とふれあう

2006年度、川崎市で初めてのコミュニティ・スクールとなった川中島小学校（榊原誠校長，481名）。880年余の歴史をもつ「川崎大師」との所縁の深い門前町の一隅にあり、古くから地域住民や保護者との連携に取り組んできました。「子どもが主役」をモットーに、さまざまな人々とかかわりから、多様な価値観を学び取る活動を積極的に行っています。



▼ 60年以上梨園を守ってきた「太田農園」の太田嘉治さん(78)から、梨の特徴や育て方などを教えていただきます。約100本ある梨の木のうち、長十郎は26本が残っています。



▲ 郷土の誇りである長十郎梨を深く知る学習は、市内のNPO法人「多摩川クラブ」の協力を得て、4年前から行われています。1893年に発見されて以来、長く人々に愛されてきた長十郎梨ですが、現在はより甘みや水分の多い品種にとってかわられ、発祥の地川崎でも、残る木はわずかで、いずれも古木。保存の道を探っていますが、なかなか難しいとのこと。

## 学校の外に出てみよう！

川中島小学校のある川崎市の大師地区は、かつて全国を席卷した梨の人気品種「長十郎」が新種として発見された地です。この日は、市内の梨園で、4年生の体験学習が行われました。梨園の経営者の太田さん夫妻やNPO法人「多摩川クラブ」のボランティアさんへ、梨の生長や農園の歴史など、子どもたちから次々に質問が飛び出します。ふだんから、たくさんのお校外の人たちとふれあっている子どもたち。この日も、どんどん話しかけています。

## 体験学習で自尊心をはぐくむ

川中島小では保護者や地域・企業、NPO法人など、多様な人材に支えられて行う体験学習を積極的に行っています。「長十郎梨」学習に取り組む4年生。5年生は、環境学習を映画で表現します。子どもたちそれぞれが、監督・脚本・照明・カメラなどの役割分担を決めて製作し、商業施設で上演します。6年生は「日本のこころ和のこころ」として、和楽器など日本の伝統文化を学びます。「サマーチャレンジスクール」では、30以上のプログラムを設け、地域や企業、プロスポーツクラブの



1 枝の張り方、梨棚の特徴など、たくさんのお話が聞けました。  
2 真剣に観察。気がついたこと、考えたことをシートにまとめていきます。



2



4



3

3 樹齢約100年を数える長十郎の古木。どんな音が聞こえるのでしょうか。

4 この日は、NPO法人「多摩川クラブ」代表の、俳優の中本賢さんもかけつけて、観察のポイントなどを教えてくださいました。

5・6 2009年9月に行われた、長十郎梨の収穫祭。ダンスを披露し、自分たちが見守ってきた長十郎梨を市民のみなさんにふるまいました。



6



5

方々と体験活動を行っています。

榎原校長先生は、「多様な体験学習で、子どもたちの自尊感情や自己肯定感を育てたい」と話します。「学校の先生だけではなく、いろいろな立場の人とかかわることで、子どもたちに、物事の考え方や価値観に多様性が出てくると感じます。同じ経験をして、その子その子で受け止め方の違いがあるのは当然です。いろいろな体験をする場をつくり、皆さんの体験の中から自分で価値を見いだして、自分にはこんなことができるんだ、こんなことに興味があるんだ、と、自分に自信をもてるようになるのが大事だと思っています。」

### 人とかかわりの中で発見を

「地域や地元企業の方たちとかかわるとこんなにもしろいことがあるんだ、地域の人に話すとこんなことができるんだ」と発見してほしい」と校長先生。現在、川中島小では「学び創造」「学校評価」など六つのコミュニティが組織され、学校と地域、保護者が手を携えて子どもの育ち・学びを支えています。

たくさんの人とかかわりの中で伸び、広がり、輝いてほしいと願う、川中島小学校の挑戦は、これからも続きます。



## 小中一貫教育校としての第一歩

名古屋市立笹島小学校 笹島中学校校長 田中 潤

愛知県

**笹**島小学校は、新明小・六反小の2校が統合して、本市 264 番目の小学校として開校しました。そして、笹島中学校と同一敷地内で、小中学校の子どもが共に同じ施設で学ぶ、名古屋市初の施設一体型の小中一貫教育校となりました。この新しい一体型施設の特徴は、地中熱を利用して、夏は涼しく冬は暖かく室温を調節する半地下式体育館、太陽光発電の利用、雨水を利用したトイレ流水など、環境に配慮している点です。

また、本校は、帰国児童生徒教育推進校のため、多くの海外帰国児童生徒が通い、個別指導を受けつつ地域の児童生徒と学習している点も特徴です。



このような特徴をもつ本校の校訓は、「広くやさしく元氣よく」で、次の

四つの目標を定めて教育活動に取り組んでいます。

①確かな学力の伸長

教科によって、中学校教諭が小学校の授業に参加したり、小中の系統性を重視して指導を行ったりしています。

②国際理解教育の推進

外国人講師との交流体験や、海外帰国児童生徒から在留国の様子や慣習を聞くことで、多文化共生の国際感覚を育てています。

③地域文化の継承と発展

地域の山車保存会の方にお囃子や山車について教えていただき、伝統文化を大切にすることを育てています。

④心の教育の推進

様々な交流体験・ふれあい体験を段階的に行い、豊かな心の育成を目指しています。

その他、小中共通の努力点「自国の文化を理解し、多文化共生を目指す児童生徒の育成」の達成に向け、授業検討をしたり、合同学校行事を工夫したりするなど、施設一体型の特性を生かし、小中の全職員が協力して教育活動にあたっています。

## 地域とともに誇れる学校づくり

沖縄市立越来小学校校長 蔵根 美智子

沖縄県

**越**来小は、琉球王朝の第一尚氏王統六代の尚泰久が越来王子として政治を行った、由緒ある地域にあり、創立 128 年という長い歴史をもつ。また、「飛び安里」（ライト兄弟より 100 年以上も前に人力の飛行機をつくり飛行に成功した人物）など、周囲に多数の文化財がある。このような地域の誇りが教育に対する関心につながっており、校長として心強い。

沖縄市では、現在「学校支援地域本部事業」に取り組んでいる。これは地域支援コーディネーターを中心に地域の人材、教材を意図的・計画的に学校教育の中

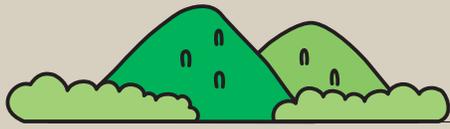


で活用し、教育の質を高めるものである。本校では、地域に誇りをもつ地域の人材と連携・協働し、

現在、①学習ボランティア ②地域の名人先生 ③安全見守り隊 ④環境ボランティア ⑤越来小カレッジ（定期的な学習会）などを行っている。

6年生の総合的な学習「ふるさと再発見—越来の良さを見つけよう—」では、郷土博物館学芸員が学校周辺の文化財を案内した。児童からは、「首里城と同じくらいすばらしい城が自分たちの住んでいるこの地にあったことを自慢したい」（越来城跡地）、「ライト兄弟より前に飛んだ人が越来にいたことにびっくりした」（飛び安里の生家跡）など、地域の歴史にじかに接した感想があがった。また、この後、地域の老人会へのインタビューなどを行い、調べたことを新聞社を通して社会へ発信するなど、学習の幅を広げている。学芸会の劇では「越来城」を取り上げ、劇のシナリオづくりや方言、空手、獅子舞、琉球舞踊、道具づくりなど地域の方々の指導を仰ぎながら劇を地域住民と共に創造している。（写真は平成 21 年度の劇の一場面）

このように、地域住民と子どもとの交流が深まることで、子どもたちは地域に誇りを持ち、自己有能感を深め、学ぶ意欲、思考力、表現力を高めるものと考えている。



## 「学校」と「地域」を繋ぐ「もがみサポート塾」

最上町立最上中学校校長 加藤 岩雄

山形県

**最**上中学校は、山形県の北東部に位置する人口1万余の純農村の町にあります。町内には全国的にも珍しい「塚田分水嶺」という、日本海と太平洋に流れ出る川の分岐点があります。地域全体の少子化がいちだんと進む中で、よりよい人間関係づくりの面から生徒のコミュニケーション能力を高めるためにも、より多くの地域の人々と関わる必要があります。

そんな中、2年前に学校支援本部事業を立ち上げ、この事業を「もがみサポート塾」と名付けました。この事業のボランティアとして参加してくれる方々が、生徒と接することで元気をもたらしていることや、参加する「お年寄り」が、このサポート塾で生き甲斐を見いだしていることにも、実は大きな意義があります。

実際の活動は、校内の余裕教室を活用し、拠点にしています。サポート塾便り（全町内回覧）、サポート塾ギャラリーの開催（写真、切り絵、ポタニカルアート、墨絵、水彩画、手芸、刺し子などの町民の作品展示）、マーチングバンド大会の衣装づくり、校庭のバラ・アジサイの剪定、駅前での挨拶・見守り隊活動、総合

学習に関わる地域ボランティアの紹介や斡旋、学習支援として数学塾・英語（英会話）塾（週1～2回程度で放課後）を実施しています。さらに、昼休みの本の読み聞かせや3年生への学習支援として、夏季休業中にボランティアの協力を得て、数学や英語を中心とした学習会を実施しました。

この事業を通して、多くの地域の人々の協力を得ることができ、学校と地域の結びつきが強まりました。まさに「地域の子どもは地域で育てる」です。数学塾や英語塾では生徒のやる気を引き出し、「わかった」という思いをもたせたことは大きな収穫です。今後、地域にこの趣旨をさらに浸透させ、読み聞かせなどを通して読書活動の質も高め、よりよい言語環境を創りたいと思います。



## 不登校対策プロジェクト

東大和市教育委員会 学校教育部参事兼指導室長事務取扱 今城 徹

東京都

**東**大和市教育委員会では、不登校の問題を解決するために、平成20年度に教育委員会内にプロジェクトチームを立ち上げ、対応を図ってきました。平成21年度には不登校対策研究協力校を募集し、市が推進する対応を実施してもらいました。さらに、平成22年度からは不登校対策研究協力校を全校に広げて実践しています。

各学校が実践したことは、次の四つです。

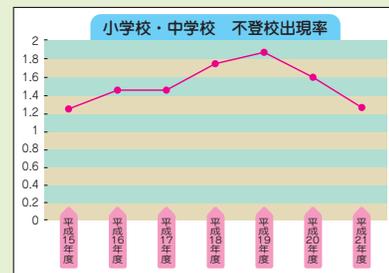
- 【対応1】 学校への欠席受付方法の工夫
- 【対応2】 連続7日以上欠席者（正当な理由がない）に対する、校長等面接の実施
- 【対応3】 不登校初期段階児童・生徒へのダイヤグラムによる分析・対応
- 【対応4】 不登校初期段階児童・生徒および希望児童・生徒へのインテークの実施

また、プロジェクトチームでは、スーパーバイザーとして宮崎大学大学院教授小野昌彦先生にアドバイスをいただき、教員および保護者向け講演会の実施・各学校への指導助言・校内委員会への出席などを行って

きました。

具体的には、学校では、保護者に児童・生徒の欠席を連絡する際、検温をし、体調を正確につかむとともに、必要に応じて医者の診察を受け欠席する必要があるか否かを判断してもらうようお願いをしました。また、不登校児童・生徒には、校長自らが面接をするともに、独自のダイヤグラムを使って分析し、児童・生徒の課題を明確にして、その課題を克服する対応を図っています。さらに、中学校の校内委員会に巡回相談員が出席し、適する関係機関につないでいくようにしました。

その結果、増加を続けていた不登校児童・生徒数が減少に転じ、この2年間で約32%減少を達成しました。引き続き、本プロジェクトの充実に取り組んでいきたいと思っています。





# 地球となかよし

# ゼミナール



子どもたちのメッセージに学ぶ

毎年、たくさんの作品が寄せられる「地球となかよしメッセージ」。応募いただいた学校の取り組みをご紹介します。

## 子どもたちに教えられた

## 環境教育における大切なこと

科学技術の発展に伴って、環境への影響が懸念されるようになってきました。それによって人々の関心も年々高まってきており、これは大人だけの問題だけでなく、子どものうちから意識させたいという思いもだんだんと強くなってきています。

本校では昨年度から環境教育に本格的に取り組み始めました。具体的な計画を立てて行うことは初めてだったため、何にどう取り組むかという段階から行いました。私が担任をしていた3年生では、まずは子どもたちの興味関心を引き出すことが第一と考え、子どもたちが普段から口にしている「エコ」という言葉を取り挙げ、活動の一つとして、「エコのポスター作り」を夏休みの宿題に、「地球となかよしメッセージ」に取り組みました。

直してまだ着られるようにすること、出かけるときにはマイボトルとマイ箸を持って出かけることなど、それぞれ個性あふれる作品が集まりました。

西川弘紀さんは、毎日少しずつできることを五つ考えて、一つ行動すると一枚の折り紙を貼り、大きな気球の絵を作り上げました。西原正斗さんは、おばあちゃんの家で目にした取り組みから、自分の家でできることはなにかと考え、その違いをポスターにしました。この活動を通して、二人は共通して、身の回りのことを見つめ直し、自分にできることは何かと意識し始めました。

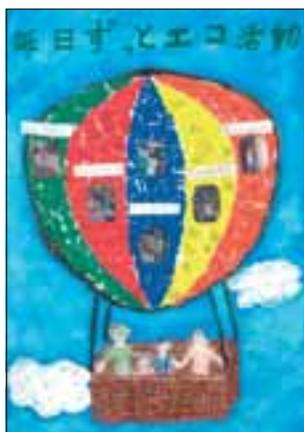
こつこつと積み上げることの大切さを感じた西川弘紀さんは、自分の住むまちのゴミ収集方法が変わったことから、ゴミに焦点を当て、自分にできることを増やしています。西原正斗さんは、身近なことを強く意識するようになり、使った小さくなった鉛筆を、無駄

なく使う方法を考えるに至っています。的確な視点に驚かされます。

今年の夏もぜひ、環境について考えさせたく、このポスター作りを課題としました。1学期最後の日、西原正斗さんは「先生！ぼくもうやること決めたんだ！」とその中身を嬉しそうに話してくれました。それはとてつもなく大きな発見をしたかのような喜び方でした。環境に配慮するというと「分別して大変だ。」または「マイ○○をしなければならぬ。」などと億劫になりがちですが、このことから身の回りのことを楽しみながら工夫することや取り組みることが、環境教育において本当に大切なことではないかと感じさせられました。

この子どもたちの夏休みは、きっと未来へつながり、地球となかよしになる充実したものであるのではないかと、今から期待しています。

### 2009年度 環境大臣賞



毎日ずっとエコ活動  
西川 弘紀

ぼくは、夏休みに少しずつのエコ活動をつづけました。1回の活動をするごとに1まいのおり紙をはって切り絵にし、気球をかきました。一つ一つのエコをたくさんすると大きな気球をとばすぐらいの大きな力になると思います。未来の地球をきれいにするためにみんなで毎日エコ活動をしていきたいです。

### 2009年度 入賞



ぼくの出来る事  
西原 正斗

ぼくのそ母の家には庭があるので、台所で使った水を庭の木や花にあげたりしています。生ゴミはあなをほってうめています。生ゴミは日にちがたつと土にかえっているので、同じところにうめられます。

ぼくは、マンションにすんでいるので、そ母のように庭に水をながしたり、生ゴミをうめたりできません。ぼくに出来る事は台所のこり水をベランダにある花にあげたり、水道水をむだにしない、食事をのこさず食べる、使った電気はけすといった事やって地球をまもっていきなさいと思います。

コラム

いまだき コドモ事情

## 「自意識過剰」が 人生の原動力



香山 リカ  
(精神科医・立教大学教授)

辛口の調味料，ラー油が大ブーム。子育てを終えた私の友人は，こう言った。

「私が子育て真っ最中の頃は，とにかくなんでも子どもにあわせた甘口の味つけだったのに，いまは子どもがおとなにあわせてラー油。時代も変わったわね。」

子どももラー油を食べているかどうかはわからないが，子どもがいても「大切なのはあくまで自分」と生活スタイルを変えないおとなは，増えているような気がする。もちろん，それじたいはよいことだと思うが，“おとな中心”が行き過ぎると「子どもなんかいないほうが」と虐待につながる危険性もある。

そんな中，敏感なおとなの気持ちを察知して，「私なんかいないほうがいいんじゃない？」と自分の存在のために自信を持ってない子どもも増えている。

ただでさえ今は情報化時代，子どもたちはテレビやネットなどを通して，「世の中にはすごい才能を持った子どもや若者がたくさんいる」といや



でも知らされる。「私ってピアノの天才じゃない?」「僕，おとなになったらメジャーリーガーになるんだ!」と無邪気に夢を語る前に，「私なんてたいしたことないかも」とってしまうのだ。診察室で子どもや若者の特技や趣味の話を書き，「へー，すごいじゃない!」と興奮ぎみにほめ，「先生，なに言ってるの?こんなの中の下くらいだよ」と冷静なことばを返されることもよくある。

本来なら，子ども時代には過剰すぎる自信，自己愛を持っているくらいでちょうどよいはずだ。「みんな私がいなくちゃダメなんだよね」「僕って世界一，すごいヤツかも」。いわゆる“お山の大将”的な自意識こそが，その後の長い人生を乗り切っていく原動力になるはず。

どうだろう，たまにはおとなは我を忘れて，「すごい!あなたって天才!」「こんなにすごい子，見たことない!」と子どもを手放してほめてみてよよいのではないか。私から見て最高なら，この子は最高。教育や子育てには，そんな“自分勝手な見方”も必要なのだ。🍀

## 地球となかよし メッセージ 2010

### 作品発表のお知らせ

「地球となかよし」という言葉から感じたり，考えたりしたことを，写真やイラストにメッセージをつけて表現する「地球となかよしメッセージ」。今年度も，素晴らしい作品が集まりました。

「地球となかよしメッセージ2010」入賞作品は『Educo』2011年冬号(2011年1月下旬発行予定)で発表します!

昨年度の入賞作品は，教育出版ホームページでごらんいただけます。(『Educo』バックナンバー、「地球となかよしメッセージ2009作品集」についてはお問い合わせください。)



# ほっとな 出会い



料理研究家

## コウケンテツさん

大阪府出身。料理研究家である母・李映林の料理教室のアシスタントを経て独立。NHK「きょうの料理」や雑誌「オレンジページ」など、テレビやネット、雑誌・新聞連載などで数々のレシピを披露。著書『人が幸せになるにはごはんを作ればいいと僕は思う。』（主婦と生活社）、『いつものかぞくごはん』（小学館）など。

### 自分でできることで食への関心が育つ

幼稚園の料理教室で、きのこソースのハンバーグをつくった時のことです。試食の時、きのこを全然食べていない子がいました。「あれ、何で食べないの」と聞くと、本人ではなくお母さんが、「この子はきのこは嫌いで食べないから」と言うんです。僕は子どもに、「せっかくな一生懸命つくったんだから一つ食べてみようよ」「しいたけはこんな形だよ」「食物繊維もあって体にいいねんよ」と、きのこのよさを一生懸命アピールして（笑）。それで一口食べるという口また一口と。なんだ、食べられるやんと。子どもは食材に触れ、自分で料理することで食にどんどん興味を持つんですね。

す。白い殻の卵が、割ると黄身と白身になる。かきまぜると真っ黄色になる。焼くと固くなる。粉をまぜるとホットケーキやクッキーになる。形が変化していくのをおもしろく感じるって、実は料理の醍醐味なんですよ。子どもは、そこから食への関心を深めるんですよ。

### 料理は「想像力」そのもの

料理は、とても想像力を働かせるものなんです。つくることですが、それ以前にも、例えば、チラシを見て、特価の食材をどう買うか。冷蔵庫に収納するには空間をどう利用するか。これを三日に分けてどう調理するか、など。

想像力ということでは、以前、母校の小学校（大阪市立海老江東小）で、6年生に「学校をイメージした料理をつくらう」という授業をしました。最初はほぼ全員、「海老江」だからエビフライとか、エビ料理しか出てこなかった。6年間過ごした学校のイメージがエビだけというのは寂しすぎます。だからもう一回、いろんな人に話を聞いてきて。学校をいろんな角度

から見ることによって、想像力をふくらませることができると思ったんです。何かを生み出すと思うときは、先入観なしにその対象を知る努力をしないとイケないんじゃないかな。今まで何気なく過ごしてきた学校の歴史などを知ることによって、違うイメージが新たに生まれ、将来に対して何か価値のあるものがつくれたりするんじゃないかと思ったんです。

### ライフスタイルにあわせて楽しい「食」を

食育のイベントなどにもよく参加しますが、食育は、義務になると苦痛でしかなくなってしまう。家族の予定がなかなか合わない家庭なら、月に1回でも、みんなで集まってごはんをつくる会をしよう、1品だけ手づくりしてみよう、とか、まずはうんとハードルを低くするのがいいと思います。最初から高い目標を掲げてしまいうのではなく、ライフスタイルに合った方法というのをそれぞれが考えればいい。楽しいはずの「食」がつまらなくなるとするのは人生の損だと思えます。「好き嫌い」も、がまんして食べるのではなく、いつか子どもが気づいてくれるかもしれない、それでいいんじゃないかな。結果をすぐ求めるより、ゆったり長い目で接してあげるのも大事じゃないでしょうか。

僕は子どものころ、家族が集まるとの晩ごはんの時間が大好きでした。ごはんを食べながら、その日あったことを家族に話すのが楽しくて。そうすると、ごはんもおいしいし、すっかり眠れる。いやなことがあっても、家族に話すことで、次の朝からまたがんばれる。食事中に話すことで、両親も、自然と意見交換できたり、日々子どもたちが成長していくことを感じたりできていたようです。食事は家族の絆を深める大切な場でもあったと、僕は実感しているんです。

## Educo Salon

前号について寄せられたご感想です。

◆巻頭インタビューの田部井淳子さん「困ったときどうしたら解決するかを考える能力が一番大切」に同感です。最近の報を見ていると、子どもの困難に出会うチャンスを奪っているように思います。試行錯誤の体験の中から耐性や生きる力が生じるものと思います。（北海道 榊原勝三）◆「地球となかよしトピックス」、さいたま市立榎竹小学校「ひとり鉢 自分だけの盆栽」の実践に驚き、何度も本文や写真を見ました。児童が900名を超える大規模校では、地域にとって大切な盆栽であっても教育活動に組み入れるのは難しいと思います。「盆栽へのかかわりを小学校だけに閉じてはならない」という姿勢、まだまだ実践が広がるような気がします。機会があれば、訪問して参観させていただきたい実践です。（北海道 飛鷹保広）

## なかよし宣言

わたしたちをとりまく自然や社会は、科学技術の進展や国際化、情報化、高齢化などによって、今、大きく変わろうとしています。このような社会の変化の中で、人間や地球上のあらゆる命がのびのびと生きていくためには、人や自然を大切にしながら、共に生きていこうとする優しく大きな心をもつことが求められています。

わたしたちは、この理念を「地球となかよし」というコンセプトワードに込め、社会のさまざまな場面で人間の成長に貢献していきます。